時事新報には毎號詳細なる商況物價の報告あり

時事新報は全國中紙面の最も廣き新聞紙なり

時事新報

第三千七百五十五號
明治廿六年九月八日　金曜日
舊曆癸巳七月廿八日　（戊申）
日出午前五時十九分　日入午後五時五十七分
月出午前二時三十五分　月入午後五時四分
滿潮午前三時十四分　午後三時五十一分
（西曆一千八百九十三年）

時事新報定價

時事新報は毎號八面乃至十二面にして詳細なる商況物價の報告あり其代價遞送料は左の如し

一號 貳錢五厘〇一ヶ月 前金五拾錢〇三ヶ月 前金壹圓四拾五錢〇六ヶ月 前金貳圓八拾五錢〇一ヶ年 前金五圓六拾錢〇月曜日休刊（此他大祭祝日年始年末等一切休刊セズ）

時事新報遞送料

一　日本國內並に朝鮮國京城、仁川、釜山、元山津　一ヶ月　金拾三錢
二　南亞米利加、中央亞米利加、米國若くは加奈陀を經て郵送する歐洲各國　一ヶ月　金六拾錢
三　北米合衆國、英領加奈陀、布哇諸嶋　一ヶ月　金三拾錢
四　香港を經て郵送する亞細亞諸港、太平洋諸嶋、濠洲　一ヶ月　金六拾五錢
五　露領浦潮斯德、淸國諸港　一ヶ月　金三拾五錢

時事新報廣告料（前金）

一行五號活字廿四字詰	一日限	一日以上六日迄	七日以上
一行ニ付	十三錢	十一錢	十錢五厘

本社へ寄稿に付

東京府下を始め各府縣に通信社なるものありて是より各新聞社に報道を發送し各新聞社は之を受けて紙面を填塞するより各社同一の記事を掲ぐること尠からず獨り時事新報社は社員並に通信員の多きを以て斯類の社に通信を依賴せずと雖も世間往々此事を知らずして通信社にさへ報道すれば本社にも其報道は達する事と信ずる方多きが如し爲めに行違ひを生じたる場合も尠からざれば本社に記事論說を寄稿せんとする方は直接に本社に向け發送あらんことを請ふ

時事新報社に達したる投書の原稿は凡て寄稿者に返戾せず又本社に保存せず

時事新報

生絲業者の注意を望む

銀變以來外國爲替相場の動搖を來したるが爲め我貿易業は一時方向に迷ひたるの姿ある中にも生絲の取引は影響を被むること最も甚だしく其橫濱に堆積せる在荷は既に一萬何千梱に達したるよし此後今のまゝにしてれひ〳〵地方出荷の盛んなるに至らば賣行の捗々しからざる上に絲の產出は年々增加する事實より推して本年も幾分を增したる可ければ旁々以て四萬五萬にも及ぶ可しとは其道の人の皆云ふ所なり既往を回顧するに去明治二十三年在荷の堆積三萬梱に達したることありて今に至るまで無比の多數として我輩の記臆する所なれども本年果して四五萬にも及ぶことあらば當業者の困難は申す迄もなく併せて一般經濟界の損失迷惑たるや實に從來の比にあらざる可し然るに今橫濱の市況に照して當業者の意衷を察するときは曩て爲替相場の落着次第打て替つて絲の手合を見る可しとて隱然持重し敢て深く懸念せざるもの〻如くなれどもイヨ〳〵其見込に違ふことなきや否やは我輩物に危ぶむ所なき能はず蓋し今日生絲貿易の不活潑なるは爲替相場の動搖不定に由るといふと雖も銀變に伴ふて米國の商界に一大恐慌を起し一般の不振を釀したると共に絹織物業の如き殆んど生息なき程に打れたること重なる原因なれば其景氣にして回復せざる限りは假令ひ爲替相場のみ落着するも假に生絲取引の盛況を呈す可しとは思はれず或は云ふ不景氣とても亦同じく銀變によりて生じたる波瀾なれば銀問題の一決により爲替相場と同樣舊の平地に復す可しとの說あれども既に彼の如き大恐慌を起したる上は急に其原因を除けばとて同時にまた其結果の回復を望む可らざること猶ほ大病に罹りて惱亂したる者が醫藥によりて其病源を治すと雖も身體の憫弊は直に平癒に至らずして多少の時日を要するが如く實際の事情に於て免かる可らざる所のものなり然のみならず米國にては例年穀類の季節に際する每に都會の金を地方に吸收せらるゝの常にして本年も最早その季節に臨みたることなれば其邊の關係も亦大に思はざる可らざる譯にして平常無事の事にてすら金融の忙はしき折柄なるに今や類ひ稀なる恐慌の餘波を以てす經濟界の混雜想ひ見る可し此際一縷の望を銀問題の一決に繫ぐとは誠に不安心の至にして早くも向後半年位を經過するに非ざれば商況の回復は先づ以て覺束なしと觀念せざるを得ず左れば銀問題の決着して商況平復の後は兎も角も當分の間は我生絲貿易も取引活潑ならずとせんか半年の時日短きに似て短からず橫濱の在荷はます〳〵堆積して結局窮迫の餘、亂暴なる投賣を試むる等のことゝなりて其困難不利益し容易ならざる可し生絲業者たる者豈注意する所なくして可ならんや然りと雖も今日は未だ右の所說を實にしたりといふにあらず假に周章狼狽して投賣などするは我輩の敢て取らざる所なれども唯一圖に銀問題の決着を眺め急に景氣の一新を期望して現に取引に賣惜みの色を呈するが如きは誠に氣遣はしき次第にして其不日に後悔あらんを恐るるのみ從來とても賣惜み〳〵て果は投賣に陷りたるの事例珍しからず每度實驗したる覆轍なるに本年の如き前途不安の兆候多分なるに際し猶ほも漠然として賣惜むとは果して策の得たるものなるや我輩は寧ろ幾分の安値にても着々處分し去るを專一として在荷堆積の極度に達し大頓挫の否運に遭ふこと勿らんを斷る者なり

官報

○內務省告示第四十三號

一日本錄行鑛山株劵（日本銀行兌換銀券一圓ニ摸擬シタルモノ）　發行者未詳

右出版物ハ安寧秩序ニ妨害アリト認ルヲ以テ其發賣頒布ヲ禁止ス

明治二十六年九月七日　內務大臣伯爵井上馨

○第二豫備金支出

明治二十六年度第二豫備金支出

第十五回

一金千九百七拾五圓　獸疫豫防費

和歌山縣ニ於テ牛疫豫防費ヲ要シ本行ノ金額第二豫備金ヨリ支出ノ儀農商務大臣ヨリ請求有之本大臣同意ヲ表シ之ヲ上奏シ本月四日勅裁ヲ得タリ

明治二十六年九月七日　大藏大臣渡邊國武

雜報

○紐育貧民の不穩　近頃打續く不景氣の爲め業を失ひたる紐育の職工は追々不穩の擧動を爲すに至れり去る八月十七日同市東區第十丁目邊に於て朝より三々五々相率ゐて徘徊するものあり次第に其數を增し後には少くも三千人以上の人數となり集會の場所なきに究する所より誰云ふとなくワルハラ會館が宜しかるべしとて孰れも之に同意せり折節同館の主人は不在なりしが大勢の人數推寄せ來るとの報前以て聞えければ留主中の家族一同出入口の戶締りを嚴重にして用心する內軈て推寄せ來りしが故に來意を尋ぬれば集會の間坐敷を借受け度し但し席料として拂ふべき一仙の金もなしとのことなり依て館內よりは貸すこと成り難き旨返答したれども何條彼等は聞入るべき辭むを合圖に亂暴を始め或は硝子窓を碎き或は戶を破り遂に殘らず亂入せり此日集りしもの〻多くは男女服、帽子等の裁縫職工にて平生は針若くは鏝火斗の外危險なるものを取扱はざるに當日は各々火器若くは小刀等を携へ激烈なる語を用ひて巡査等に抵抗し拘留されたるもの多かりしよし

○支那人放逐　カリフオルニヤ州フレスノ市に於ても同樣のこと起れり八月十四日何處より來るともなく追々市に集るもの多く後には千餘人に及び演說に勵まされて次第に激昂する模樣容易ならざるに付き市內の重立ちたる人々は種々の方便を用ひて漸く鎭撫するを得たり彼等は職業なきを支那人の爲す所とし同國人放逐を名として支那町を亂暴せんとしたる樣子なれども群集の多くはモンタナ、アイダホー及びネヴアダ等に於て銀鑛を休業したる爲め流れ來りしもの〻よし

○自由新聞の發行停止　昨日發刊の自由新聞は治安妨害の廉を以て發行停止を命ぜられたり

○金銀及び磅相場　去月二十八日より本月二日に至る一週間金貨及び磅相場幷に前週平均比較高低は左の如し

日別	金貨（百圓に付き）銀貨	磅（一磅に付き）銀貨
二十八日	一六六・〇〇〇	八・一七〇二
二十九日	一六六・〇〇〇	八・一七〇二
三十日	一六〇・〇〇〇	八・二〇五一
三十一日	一六七・〇〇〇	八・二〇五一
一日	一六七・〇〇〇	八・二〇五一
二日	一六七・〇〇〇	八・二四〇三
平均	一六六・五〇〇	八・一九九三
前週平均比較（高低）	一・二一七	〇・〇五六一

○新刊史

●日本戰史　戰史は關原の役を敍したるものなりみれを敍したるものを參謀本部の日本戰史編纂委員とす本史一冊編年體を以て記述し補遺一冊文書一册附表附圖併せて一冊を添へて參考の便に供したり兵學上の觀察もて戰史を編したるもの洵にこの書を初めとすべし蓋し和漢の史體を難じて帝室の私記にすぎずとするもの學者の間に是れあり西歐の編纂法に比すれば和漢の史體は帝室の一部に偏して社會を寫すに薄ければ斯くいふも理なるべしされど是等の史體を帝王の私記といふべくは未だ他の側より戰史なりともいふを得べし何事を措いても戰爭をば必ず述べて本末を明にせんとする

の心、和の史家にも漢
帝記戰史共に重きを置
措き斯る史體に免れが
あり帝王の事を忌むみ
しとする所にして戰爭
まる時は是非曲直の
雲助も立法者となるの
じ善惡を正さんこと中
の憑據しがたき所以は
するの難きも亦此處に
謀本部が委員を置いて
專ら兵事に從ふもの〻
かるが故に兵力地形を
時の形勢を思出して對
せり編纂の體裁は編年
體を守らんとせざれば
なからんその月日を追
事理の關聯を鈍くし文
れずと雖も事實を重ず
ず一部讀了の後明瞭に
に當時諸將の間に往復
せしめんこと編者の豫
供したるは古の誤謬を
を混じて獨斷に陷るの
の用意周到にして古史
を得たるは寔に喜ぶべ
事實を輕んずるの風益
至つては恰も小說作る
へ古人を片付けるもの
らずと雖も之れ當に後
なく史の弊をば思出し
一圓三十錢なり京橋區

○なぐさ

●淺草座の再日延べ
しも同日は午前十一時
りといひ猶續々附込み
で日延べせり斯る 動
まで償却し其後は全
後五日間休業し來る十

●中洲の眞砂座　は今
り一番目は「月武藏
にて場割役割は左の如
場割　（一番目）信田
保中屋敷の場川勝屋
屋敷の場南町奉行所
山の場淺草奧山の場
川伯常寺の場同門前
播條鹼の場

●新盛座　は團升が病
る二日開場す狂言は忠
の如きは餘程道具方も
め討入りの場は出葉に
二回の興行は團升の新
が今度は主人公の大石
を引受け見物人は滿足
淡路守と寺坂吉右衞門
野郞右衞門を望み居り